

AICHI  
PREFECTURAL  
MUSEUM  
OF  
ART

MEMBERSHIP

愛知県美術館友の会 会報 第55号

# 空中回廊

コレクション展紹介：「『名品』はどこからきたのか？」

会員のひろば：愛知を学んだ活動（「明治」展、美術館さんぽ、「幻の愛知県博物館」展）

収蔵庫から：モーリス・ルイス《デルタ・ミュー》

友の会から：総会と記念講演会・活動紹介ほか



モーリス・ルイス《デルタ・ミュー》（1960-61年）

## 「名品」はどこから来たのか？

**美**術館では、作品名や制作年といった所蔵作品に関するさまざまな情報を管理していますが、そのなかに「来歴」という項目があります。来歴とは、現所有者がその作品を入手するまでに、ほかにどのような所有者の手を経てきたかを示した履歴です。作品が作られる「まで」のこと——たとえば、芸術家はどのようにしてその表現に至ったのか——と同様に、その作品が作られた「あと」のこと——人々はその作品をどのように評価、あるいは、否定してきたか——も美術史学の重要な研究対象です。作品の来歴は、後者の研究において有益な手がかりを示してくれます。

**と**はいえ、来歴の調査は簡単ではないのが実情です。高価な美術作品を所有しているという事実は、誇らしいことである一方で、しばしば秘密にしておきたいことでもあるからです。それでも、カタログ・レゾネなどに集約された先行研究の成果を手がかりとしながら、出品された記録のある展覧会のカタログを調査し、作品の裏面に残されたラベルやスタンプなどを解読してゆくと、少しずつ、作品の来歴が明らかになってきます。

**本**稿では、今回展示する予定の作品のうち興味深い来歴の2点を先取りして紹介したいと思います。1つ目は、当館のコレクションを代表する作品グスタフ・クリムトの《人生は戦いなり（黄金の騎士）》（1903年）です。この作品は、1903年のウィーン分離派展に出品された後、レオポルディーネ&カール・ヴィトゲンシュタインがクリムト本人から購入しています。姓を聞いてピンと来る方もいらっしゃるかもしれませんが、著名な哲学者ルートヴィ



グスタフ・クリムト《人生は戦いなり（黄金の騎士）》1903年

ヒ・ヴィトゲンシュタインの両親です。父親のカールは圧延工場の経営で成功を収めたオーストリアの大富豪で、ウィーン分離派のよき理解者でした。1897-98年に建設された分離派館の建設費用を支援したほか、結婚を控えた末娘マルガレーテの肖像（1905年完成）をクリムトに依頼しています。

**ウ**ィーン大学講堂のために制作した3つの作品《法学》《医学》《哲学》（1899-1907年）が大きな論争を巻き起こしたように、理性よりも衝動を、秩序よりも混迷を主題とするクリムトの作品は、社会の主流としての啓蒙主義とは相いれず、しばしば衝突を引き起こしました。しかし、その一方で、彼の作品はヴィトゲンシュタインをはじめ、リリー&フリッツ・ヴェルンドルファー、ゼレーナ&アウグスト・レーデラーといったユダヤ系の富裕層からの支持を得ていました。皮肉にもそれがゆえに、ナ

チによるオーストリア併合後、多くのクリムトの作品が失われることとなります。カールの没後、長女ヘレミーネに引き継がれた《人生は戦いなり》は、この激動の時代をどうにか生き抜くことができました。1980年代に再び市場に登場したこの作品は、個人所蔵者を経た後、間もなく開館する愛知県美術館のために1990年に購入されました。

**本**稿で紹介するもう一つの作品は、エルンスト・ルートヴィヒ・キルヒナーの《グラスのある静物》（1912年）です。この作品は、制作から約5年が過ぎた1917年頃にロジー&ルートヴィヒ・フィッシャー夫妻によって購入されました。夫妻はフランクフルト在住の美術コレクターで、「ブリュッケ」を中心にドイツ表現主義の作品を数多く集めていました。しかし、ルートヴィヒが1922年に没した頃、ドイツは第一次大戦後のハイパーインフレに見舞われており、ロジーは家計を支えるべくコレクションの売却を開始します。そして1924年、《グラスのある静物》を含む24点の絵画が、ハレ市立モーリッツブルク美術館に売却されました。現在もこの作品のキャンバスの木枠には、「市立モーリッツブルク美術館」という蟬印が残されています。

**1** 933年にヒトラーが首相に就任すると、表現主義をはじめとする前衛美術は迫害を受け始めます。そして《グラスのある静物》は、ナチによってモーリッツブルク美術館から接收され、悪名高い1937年の頽廢芸術展に出品されてしまいます。ナチは接收・略奪した美術作品を焼却してしまうこともあれば、外貨獲得のために国外に売却してもいました。《グラスのある静物》は、売却活動の中心的役割を果たしたギャラリーのひとつ、ベルリンのカール・ブッフホルツを経由して、接收・略奪品のアメ



エルンスト・ルートヴィヒ・キルヒナー《グラスのある静物》1912年

リカでの販売役を担ったニューヨークのクルト・ヴァレンティンへと渡りました。作品はアメリカの実業家の所有となったのち、一旦はセントルイス美術館の所蔵となりましたが、再び市場に出て1992年に当館が所蔵しました。このように時代に翻弄された《グラスのある静物》ですが、当館とモーリッツブルク美術館は、接收の歴史を互いに確認したうえで、2019年にモーリッツブルク美術館で開催された里帰り展への出品を果たしました。

このように美術作品の来歴には、それぞれに様々なドラマがあり、時代ごとに作品がどのように受容されてきたかが刻み込まれています。当館における来歴調査は十分に進んではいませんが、今回の展示では、当館の西洋美術の「名品」を主な対象として、これまでの来歴調査の成果を紹介し、今後の研究の足がかりとしたいと考えています。

愛知県美術館学芸員 黒田和士

# おかげさまで来年は「愛知県美術館友の会」30周年です！

## 「美術館ニュース『窓口』」 でたどる友の会の歴史

### 創刊号

巻頭ロゴマークは  
宮脇晴のデザインを  
もとに杉本健吉が  
作成

アイチアートクロニクル展  
カタログ272頁より



愛知県美術館の前身、愛知県文化会館美術館の時代に「ニュース『窓口』」という広報誌が発行されていました。この「ニュース『窓口』」(以下『窓口』)についてはアイチアートクロニクル展(2019年)のカタログでも2か所(162頁,272頁)にて紹介されています。

愛知県文化会館の「友の会」発足は、開館当初から構想されていたようです。来年は愛知県美術館の友の会発足30年。温故知新。この機に『窓口』を通じて愛知県文化会館時代の友の会の「はじまり」や先人の思いを確認することで、今後の愛知県美術館友の会が歩む道の道標にしたいと考えています。



愛知県文化会館美術館 愛知県美術館提供

### ★『窓口』とは？

- ・創刊は 昭和30年(1955年)5月
- ・創刊時のタイトルは 「愛知県文化会館 美術館ニュース 窓口」
- ・編集者は 58号(昭和35年6月)まで、太田三郎(愛知県文化会館美術館館長)
- ・購読料は 91号(昭和41年3月)まで10円  
(発刊当時は週刊誌30円、新聞購読料330円)  
92号(昭和41年4月)より無料
- ・最終号は平成4年(1992年)8月の381号

### ★『窓口』の創刊号は…

表紙に桑原幹根知事の「あいさつ」と太田三郎館長の「この美術館の行き方」が掲載されています。ここでは館長の新しい美術館を創りあげる意気込み、美術館がギャラリーとして地域で担う役割、「大方との、より親近な、より率直な接触面であらせたい」※1という『窓口』の由来が述べられています。

次のコーナーは館長が司会を務める座談会。桑原知事、鬼頭鍋三郎など錚々たるメンバーがざっくばらんに、美術館に注文をつけています。ロビーの雰囲気から看板のデザイン、開きたい企画などのなかに「友の会」を発足させたい、との声もあります。

※1 『窓口』1号1頁より

※2 愛知県美術館研究紀要27号(2020年度)石崎尚学芸員編「愛知県文化会館美術館の展覧会」に詳細な情報があります。

愛知県美術館ホームページからご確認いただけます。 <https://www-art.aac.pref.aichi.jp/collection/pdf/2020/apmoabulletin2020p55-126.pdf>

愛知県文化会館で開催された展覧会の紹介※2や「展覧会メモ」「個人消息」など軽めのニュースが続いたあと、8ページには友の会が以下のようなねらいで「近く誕生する」とアナウンスされています。

**直接のねらい** → 「美術愛好諸氏の美術鑑賞眼と教養との向上を図る」

**間接的に** → 「多数の美術ファンと館との密接な結びつきによってたえず美術館に生気を与え、美術と生活とがより渾然とした楽しいものにされていくことを期待」

現在の友の会会員としては背筋が伸びる発足目的が記されていました。



## ★ 友の会よいよ発足(65号・66号)

文化会館の開館から7年、友の会が発足しました。65号の『メモ』、66号(昭和37年1月発行)には、同年1月14日午後1時より愛知図書館視聴覚室にて、友の会の発会式と総会とを開催した記事が掲載されています。発会式では発起人などが挨拶し、総会では規約を決め、その後日展の鑑賞会を開くというなかなかハードなスケジュールでした。鑑賞会は、作品をみる心構えを5分野(日本画・洋画・彫塑・書・工芸)それぞれの専門家から聞いたうえで会場に臨むという、現在の特別鑑賞会のようなスタイルだったようです。ちなみに会費は年間500円(高卒初任給が9,500円の時代)。

## ★ 当時の活動

発足後79号(昭和39年3月)までほぼ毎回、<友の会だより>やく美術館「友の会」だより>として友の会活動が紹介されていましたので、主なものをご紹介します。

美術講演会	日展の鑑賞会はほぼ毎回、講師にポイントを聞いてから鑑賞
スライドの会	現地で撮ったスライドを上映
バス旅行	京都や奈良などに、バスをチャーターして向かっています。
写生会	三泊四日、白樺湖畔などでの写生会はほぼ毎年開催されていたようです。作品をつくる方面でも活動をしていました。

## ★ 文化会館閉館、愛知県美術館開館から、今の友の会発足まで

最終号は381号(平成4年8月)です。文化会館の閉館とともに、役割を終えたとして廃刊。この号には友の会会長・副会長が約30年にわたる活動における思い出を寄せていました。

愛知県美術館の開館は平成4年(1992年)10月。美術館の性格が、ギャラリーから所蔵品を保有し展示するミュージアムに変わったこともあり、友の会の活動がどのようなものであるべきか話し合わせ、平成6年(1994年)に新しい友の会が発足することになりました。文化会館時代は「啓蒙」「楽しさ」を重視した活動が基本でした。新しい友の会は、会員・美術館双方にとって経済的・精神的な利益になること、協力関係を築くこと、に少し変わっています。現在の友の会活動が美術館にとって利益ある、よい協力関係につながっているのか。いま一度振り返りたいところです。



◇：杉本健吉氏 このほど、杉本健吉油絵目録集八全十七集Vを出した。頭価は各冊とも一〇〇〇円。  
◇：生活の中の美術展、拙文から広重まで、東京・サントリー美術館(パレスビル9階)で、三月三十一日(月曜日休館)まで開催、日本人のくらしのうち食生活を中心に、古代から江戸時代に至る生活美術品を陳列している。

### 美術館「友の会」だより

まず、発起人代表長谷川寛三氏の挨拶に引き続き、議長を連出し、友の会会則の制定、役員を選任を行なった。ついで、作家側から美術家協議会事務局長岡田徹氏、異側から理事課長片山五郎氏、美術側から管理部長鈴木一郎氏からそれぞれ挨拶があり、盛会のうちに式を閉じた。  
つづいて、友の会の最初の行事として、おりから開催中の第四回日展に因んで、鳩谷自然(日本画)遠山清(洋画)加藤潤光(彫塑)阿部翔山(書)大橋桃之輔(工芸)の諸先生にお願いし、日展鑑賞にのぞんでの心構えなどについてお話し願ひ、そのあとで日展の鑑賞を行った。

### 編集後記

皆様の声をできるだけ本紙に反映させ、いきいきしたものにしてまいりたいと思ひますので、本紙に対する御意見や御感想を、または広く文化全般についての御高見などを編集者までお寄せ下さい。

昭和三十七年一月十五日発行  
編集者 田中潤三  
印刷所 弘益印刷株式会社  
発行所 愛知県文化会館  
名古屋市中区久屋町  
(栄公園内)  
電話五五一二番  
定価 10円

『窓口』66号  
8頁 部分  
昭和37年1月  
発行

# ◆愛知を学んだ活動◆

今年度は『近代日本の視覚開化明治』展に続き『幻の愛知県博物館』展が開催され、絵画や彫刻といった「美術」の枠にとどまらない、産業にも目が向けられた展覧会が開催されています。友の会でも、美術愛好家の視点から、ここ愛知の美術・産業をいつの間にか学んでいました。以下、まとめてご紹介します。



日時と場所	イベント名	概要
<p>4月20日 (木)10:30～ 〃 17:30～ 愛知芸術文化 センター アート スペースEF</p>  <p>閉館後のギャラリートーク</p>	<p>『近代日本の視覚開化 明治』展 特別鑑賞会 中野悠氏（愛知県美術館学芸員）</p>	<p>神奈川県立歴史博物館の明治期のコレクションを中心としつつ、明治期特有の表現がみられる絵画・写真・印刷物・彫刻・工芸など膨大な作品を集結させての展覧会。章ごとに見どころをご紹介いただきました。</p> <p>準備の過程で様々な発見もあり、明治期の横浜と愛知の関係もとらえて展示できたことや、明治のダイナミックな美術表現を味わってみたい、とのことでした。</p>
<p>6月25日 (日)10:30～</p> <p>ノリタケの森 則武新町 周辺</p> 	<p>美術館さんぽ</p>  <p>『自由研究』は折りたたんで菜になります</p>	<p>今回は地図だけでなく、企画者による小話、『自由研究』で予備知識をつけてから「ウエルカムセンター」及び「ノリタケミュージアム」を見学しました。閉幕したばかりの『明治展』の展示を思い出しながら「ノリタケ」の歴史や現在の事業を学ぶことができました。またその後開催されている『幻の愛知県博物館』展の予習にもなりました。</p> <p>昼食はそれぞれでとり、併設のギャラリーや近くのトヨタ産業技術記念館に足を伸ばした方もいらっしゃいました。</p>  <p>企画者による「セダン」やノリタケの歴史を紹介</p>
<p>7月6日 (木)10:30～ 〃 17:30～ 愛知芸術文化 センター アート スペースA</p>  <p>「旅する金鯱」のセクションにて</p>	<p>『幻の愛知県博物館』展 特別鑑賞会 副田一穂氏（国際芸術祭推進室主査）</p>	<p>愛知県には現在県立の博物館はありませんが、明治期には大須に博物館が存在していました。今回はその大変資料の少ない博物館にまつわる展覧会を、各章ごとにご紹介いただきました。第一章は名古屋城の金鯱を入りに「博物館」とは何かの紹介。第二章はかつて存在した博物館の概要と愛知県商品陳列館で展示された草土社の展覧会など。第三章は、もし戦後まで博物館が残っていたら…という「幻」の博物館の姿について。</p> <p>愛知県の歴史、人や会社名など、知識として知っていたものが、物語として浮き上がって見えるお話でした。</p>  <p>熱心に解説を聞く会員のみなさま</p>

# 収蔵庫から

深く知るともっと見えてくる

## モーリス・ルイス

### 《デルタ・ミュー》 (1960-61年)

本作タイトルにある「デルタ」は4番目、「ミュー」は12番目のギリシャ文字です。同じシリーズの他の作品のタイトルも、《オミクロン》(1960年、大阪中之島美術館蔵)、《ガンマ・ツェータ》(1960年、川村記念美術館蔵)など、同じように1文字ないし2文字のギリシャ文字で構成されています。意味深なタイトルですが、これらは作家本人がつけたのではなく、作家の死後、ルイスのエステート(作品や権利を管理する団体)が便宜的につけたものです。ルイスは約30年間の作家活動の中で650点以上の絵画を残しましたが、生前公に発表した作品は決して多くはなく、このことが本作のタイトルのつけられ方に関係しています。

ルイスは1950年代初頭、抽象表現主義の代表的な画家であるジャクソン・ポロックに強い影響を受けており、筆やスティック状のものに塗料をつけてキャンバスに振り垂らす「ポーリング」と呼ばれる技法で暗い色調の抽象画を描いていました。しかし1953年、画家のヘレン・フランケンサラーのスタジオを訪れた際、彼女の《山と海》(1952年)という作品を見て、ルイスは感銘を受けます。同作では、ポーリングを発展させ、薄く溶いた油絵の具をキャンバスに滲み込ませる「ステイニング」が試みられていました。この出来事がルイスをさらなる絵画技法の追求に向かわせたこととされ、1953年以前の作品はほとんど作家の手によって廃棄されています。

その後の1954年、ルイスはステイニングを彼独自の方法で展開させ、下塗りがされていないキャンバスに薄めたアクリル絵具を何層も流しかけて幕のようなイメージを作り出す、後に「ヴェール」と呼ばれるシリーズを開始します。多少時間はかかったものの、「ヴェール」は高く評価され、自信を得たルイスは1960年に「アンファールド(広がる、はためく)」シリーズの制作をはじめます。中央部分を塗り残したキャンバスの両脇から複数の色の線が斜めに流れ落ちる作品群で、《デルタ・ミュー》も同シリーズに分類されます。

「ストライプ」という新しいシリーズを開始して間もない1962年、ルイスは肺がんにより49歳の若さで命を落とします。彼のスタジオには400点以上の絵画がロール状になったまま残され、それらの作品にはサインやタイトルがつけられていませんでした。彼の画業を後世に残すためには作品の情報を整理する必要があり、彼が大きな信頼を置いていた批評家のクレメント・グリーンバーグの監督下で制作年の考証やストレッチ(木枠にキャンバスを張ること)が行われ、目録も作成されました。

そして当の「アンファールド」シリーズは、2年間で150点近く制作されているにもかかわらず生前に発表されたのは僅か2点のみで、その2点が展示された際にルイスがつけたタイトルが《アルファ》と《デルタ》でした。この先例に倣い、エステートは本シリーズのタイトルとしてギリシャ文字を管理番号順につけることを決定し、《ベータ》から始まって一周したら《ベータ・アルファ》、《ベータ・ガンマ》のようにギリシャ文字を2つ続けるといった具合に、機械的に全てのシリーズにタイトルがつけられました。

生前のルイスはタイトルに関心がなく、友人の勧めに従ってタイトルを決めることも多かったそうです。謎めいたタイトルは余計な憶測を招くのではという批判も聞こえてきそうですが、ギリシャ文字という選択はルイスのそれに他ならず、何か意図が隠されているのかも期待してしまいます。



モーリス・ルイス  
《デルタ・ミュー》  
(1960-61年) 部分

愛知県美術館学芸員 鵜尾 佳奈



#### 学芸員の横顔

鵜尾 佳奈

-Uo Kana-

愛知県美術館学芸員

兵庫県神戸市出身。趣味は映画と音楽鑑賞。好きなパンはクイニアマン。国際芸術祭推進室のプロジェクト・マネージャーから、美術館の学芸員に戻りました。来年度開催の企画展準備のために奔走しています。





AICHI  
PREFECTURAL  
MUSEUM  
OF  
ART

友の会から

## MEMBERSHIP

5月21日、愛知芸術文化センター12階アートスペースAにて、2023年度総会を開催し第1号議案「2022年度事業報告及び収支決算」、第2号議案「2023年度事業計画及び収支予算案」ともに承認いただきました。会員のみなさまがコロナ禍前とは異なる友の会活動にご理解くださったこと、感謝いたします。

コロナ禍をきっかけに始めた動画配信や美術館さんぽについては高く評価していただいていますので今後も継続していく所存です。また今年度は、満を持してバスツアーを移行に移すべく計画を練っています。少しずつですがコロナ前の友の会活動を復活させていきたいと考えています。第3号議案は「友の会役員改選」の承認。講座や鑑賞会などの企画・運営担当：丹阿弥彰子さんが退任されることになりました。各地の美術館や講師の方々との交渉し、友の会の活動を彩り豊かなものにしていただけたこと、感謝いたします。

記念講演会では拜戸館長から「アントネロ・ダ・メッシーナを再訪する」と題して、作家・作品との出会いや関わり、絵画そのものについての考察などを話していただきました。

来年は愛知県美術館友の会が発足して30年。今後も「愛知県美術館・友の会会員相互の協力関係を基盤にした、双方にとって利益ある活動」を展開することができるよう邁進してまいりますので、どうぞよろしく願いいたします。

愛知県美術館友の会会長 小林克敏



解説をする拜戸館長

### 編集後記

アフターコロナという言葉も聞かれるようになりました。会員の皆様と、より親しく交流できること、何かいっしょにできることが増えてくる予感がします。「会員のひろば」の紙面がまた一段と充実してくることを願っています。

- 編集 松下智子  
喜田泉／小林克敏／田中寛／富永晃一
- 協力 愛知県美術館
- 発行 2023年9月

### 友の会入会のご案内

詳しい活動内容を知りたい方、入会をご希望の方は事務局（下記）までお問い合わせください。入会のご案内パンフレットやホームページでも詳しく紹介しております。ぜひご覧ください。

受付場所 ★愛知県美術館 10階受付  
★友の会事務局 ★振込も可

### 定例活動

2023年4月～2023年9月

所蔵品管理	モニター	発送	受付 <sup>（豊田）</sup>	広報	ホームページ	理事会
0回	2回	3回	6回	11回	随時更新	5回

### 友の会活動紹介

2023年4月～2023年9月

2023年

4月・特別鑑賞会  
「近代日本の  
視覚開化 明治」展



解説をする中野悠学芸員

5月・2023年度総会  
・記念講演会



ノリタケウエルカム  
センターから見学開始

6月・美術館さんぽ  
(則武新町エリア)

7月・特別鑑賞会  
「幻の愛知県博物館」展



解説する副田氏と会場に入る会員

・企画展鑑賞会  
名古屋市美術館  
「マリー・ローランサンとモード」展

8月・定例活動のみ

9月・バス旅行



名古屋市美術館にて

### 友の会 これからの活動予定

10月・特別鑑賞会「安井仲治展」

日時未定ですが鑑賞会・講座なども計画中です

### これからの展覧会のご案内

生誕120年 安井仲治 10/6(金) - 11/27(月)

## YASUI NAKAJI: PHOTOGRAPHS

### 愛知県美術館友の会

〒461-8525 名古屋市東区東桜一丁目13-2  
愛知県美術館内（愛知芸術文化センター10階）

✉ [info@apmoa-tomo.com](mailto:info@apmoa-tomo.com)

ホームページへのアクセスはこちらから

愛知県美術館友の会

検索

[apmoa-tomo.com](http://apmoa-tomo.com)

tel. 052-971-5511 (代)

fax. 052-971-5617

(火・木 11:00~15:00)

✉ [@apmoafriends](https://www.instagram.com/apmoafriends)

